

## 共生の風景——日本の住まいと風土文化(前編)

大岡 敏昭  
居住環境学専攻

### 1 序 文

私は以前に、農村の古い民家の調査のために全国各地を訪ねた。古い民家は、地域によって独特のものがあるが、それはいつごろ、どうして成立したのか、そのような民家が分布している範囲とはいったい何なのか、ということが疑問としてあったからである。また、この古い民家の特徴は、近年に建てられた新しい民家にも受け継がれているが、なぜにそのような特徴を守り続けていくのか、このことをこれからの住宅においてどのように考えればよいのかという計画的な意味もあった。そしてしだいに、民家の地域独特な形式が成立した時期は江戸時代であり、それが分布する範囲は、当時、日本の国を細分化していた藩の領域ではなかったか、という仮説を考えるに至った。藩は江戸時代の自立した小国家であり、それぞれに独立した地域文化圏を形成していたのである。

独特な形式、すなわち、民家の平面や外観、あるいはその構え方は、長い人間生活の歴史の中で、その地域の風土文化との関係でつくられる。日本列島は南北に長くて、北と南に風土的違いがあるが、どちらかといえば、森林が多く、夏には高温で多雨多湿のほぼ一様の風土である。とすれば、各地域で独特の民家が成立しているということは、地域によって文化が異なっていたことになる。同じ風土であっても、文化的な枠組みが違えば、その地域の生産と生活の様式が違い、結果として民家も異なると思われる。

その仮説は間違っただけではなかった。東北、中部、北陸、近畿、九州において、かつての藩があった27の地域でそれが確かめられた。

民家の違いがあったところに、たとえば大分県の大野川上流の地域がある。大分県は江戸時代には多くの小藩が分立し、川とか尾根などさまざまな地形が藩の境になっていた。この大野川の上流も臼杵藩と岡藩との境であったが、その川の両側で、そこに建つ民家の平面は異なっていた。川の両側であるから、気候、地形、地質などの風土は同じである。まさにこれは驚きであった。また、北陸の福井藩と小浜藩の境は山の尾根であり、その山頂には有名な木の芽峠がある。水戸の天狗党809名が、かすか

な希望を抱き京都に向けてやってきたところであるが、その雪深き峠を越えて敦賀の新保に下りたところを幕府軍の手にかかって処刑されている。その志士たちの無念さに思いをはせながらその峠を越えて小浜藩の村に入ったところ、そこに建つ民家は福井藩の民家とは異なっていた。そのことを発見した時の感激は、子供のころの宝さがしの遊びでそれを発見した時の思いに似ていた。研究において仮説を実証することの楽しさと喜びを十分に味わったものである。

一方、藩が異なっても、同じような民家が建てられている地域も少なくはない。これは、藩の地域的的文化よりも風土との関係のほうが強い地域であるか、あるいは、隣の藩と同じ文化性を持っていたからと思われる。このように風土文化と民家の関係は、ある地域では風土との関係が優先し、ある地域では風土より文化との関係が優先しており、それらは複雑にからみ合いながら重層的に民家と関係しているように思う。

そのようなことで、全国的に訪ねた古い民家はこれまで約800戸を数えるが、そこでいつも気づくことがあった。それは、夏の暑い日に目ざす民家を訪ねて、その中に入ったとたん、何ともいえない心地よい涼しさであった。もちろん冷房などはしていない。にもかかわらず、入口の広い土間に一歩ふみ入ると、その地面からはひやっとする冷たさを感じ、裏口の向こうからは、さわやかな風が通り去っていく。これは、東北であろうと、九州であろうと同じであった。

冬の寒い日の調査もいく度もあった。2メートルもの積雪をかき分け、やっと辿りついた民家では、広い板間に囲炉裏があり、まきが赤々と燃えていた。その囲炉裏端へ招かれ、温かいお茶を戴きながら主人との話が弾んだのであるが、その時の私の身と心は、何とおだやかで暖かな気分であったことか。ふと、囲炉裏の天井を見上げると、煙ぬきの越屋根があり、そこから天の星空がかいま見えた。主人の話では、たまには霰がその越屋根から降ってくるという。その日の夜も冷たい風がそこから吹いていたが、不思議と寒さをまったく感じなかったのはどういうわけか。これは北陸の民家のことである。

このように、古い民家は夏涼しく、冬暖かいが、その理由は残念ながらまだ解明されていない。おそらく、茅葺き屋根と土壁と木の柱と梁がもたらす断熱効果であり、それらの構造が人にやさしく反応する自然材料であることも影響していると思う。さらに、土間と天井の吹き抜け、または開放的な空間構成にもあろう。

そして、そこに住む人びとの何とおおらかで、親しみに満ちあふれていたことか。古い民家には、農村問題の一端をたびたび見る。古いということは、さまざまな理由で新しく建て替えができないということも含んでいるからである。しかしながら、訪ねた民家のほとんどは、見知らぬわれわれを奥の広間まで招き入れ、歓待し、しかも農作業の忙しい合間をさいて話の相手になってくれた。ひとり暮らしのお年よりが住んでいることも少なくなかったが、ほとんどの人は、大いなる自然のふとこで悠然と生活していたのだ。お茶と一緒に出してくれた自慢の自家製の漬物の何とおいしかったことか。今でも忘れられない。これは東北の民家のことである。

お年よりのことといえば、かならず寝たきりや痴呆などが話題にされ、負の面ばかりが強調される。しかしどっこい、この奥深い山里では、人生を達観した元気なお年よりたちが大地を相手にたくましく暮らしていた。民家はひとり暮らしの生活には広すぎる。だが、かつてはそのお年よりと子供たちを含めた賑やかな家族であった。お年よりたちは、いずれまた、村から出ていった子供たちが都会から帰農し、再び賑やかな家族になることを夢見ている。民家はこのような家族の盛衰と変化を黙して包みこんできたのである。

民家の座敷には、先祖代々の戸主夫婦の写真が並べて掲げられている。写真は古くなるほど赤茶けており、明治のものは肖像画が多い。それを見ると、その時代々に生きたひとりひとりの人間の人生と家族の歴史を感じる。「住宅とは人生なり」とでもいえるか。現代の都市住宅が、機能性、効率性ばかりを重視し、その家族の趣味と嗜好によって決められ、住宅の考え方とつくり方は家族中心主義であり、そして一代限りの簡易な住宅であるのとは、何と大きな違いか。

現代の都市住宅は非常に貧困化していると思う。住宅の広さ、部屋の数、設備のことではない。それだけをみれば、全体においてかなり改善されている。そうではなく、住宅の考え方とつくり方の根本的なことが貧困化している。それは、自然と社会に対する住宅の閉鎖化であり、どの地域でも同じ住宅であるという画一化であり、さらに、かつての住宅にみられた豊かな空間の消滅である。総じて、自然と社会との関係がすっぽりと抜け落ちているのである。

私は、そのような都市住宅の源流である近世と近代の住宅はいったいどうであったのか、ということを考えるようになり、それを調査するためにかつての城下町であった各都市を訪ね続けている。目的は、近世の武士住宅とその様式を受け継いだ近代の都市住宅である。都市によっては、100年以上を経た住宅が多く残っており、現在もなおそこで住み続けられている。学生たちとともにそれらの住宅を訪ねたのであるが、およそどの家でも見知らぬわれわれを快く迎えてくれた。そしてそこには、農村の民家と同じように、かくしゃくとして元気なひとり暮らしのお年よりも多く暮らしていた。

それらの住宅は、私が仮説したとおり、現代の都市住宅とは異なっていた。それは住宅の考え方とつくり方においてである。閉鎖的ではなく開放的であり、画一的ではなく多様であり、豊かな空間が数多くみられた。さらに、近隣社会につながる道路に対して家の正面をしっかりと向けていた。しかもそれらは、その都市ならではの独特な住宅と町の風景であった。

学生たちをつれて、現代の新しい都市住宅にも調査に伺うことがある。しかしながら鋼鉄製の頑丈な玄関ドアの外で断られることが少なくはない。それもたいがい顔を見ずにインターホンで終わってしまう。ところが、農村における古い民家や都市の古い住宅の調査ではそのような残念な思いにはあまり遭遇しない。住宅の有り様が、そこに住む人間の感情と風情までも規定しているのではないかとさえ思われる。

また、あまり俗化していない地方都市を旅すると、そこに住む人びとの温かい思いやりに触れ、そのことがいつまでも忘れられないことがある。それは、その都市の歴史と空間的豊かさが、そこに住む人びとに人間本来の温かさをにじみ出させているのではないかとも思う。

気候環境が地域の人間生活と文化を規定するとみるのが環境決定論であるが、それを引用していえば、住まいの決定論とでもいえようか。

西洋の文化は「自我」の文化であり、日本の文化は「関係」の文化であるともいわれる。西洋文化の源が砂漠の地で生まれ、その理念は自然対決と自然克服であり、そのために自我の確立が命題とされる。これに対して、日本文化の源は豊かな森の地で生まれ、その理念は自然を崇め、自然とともに生きることであり、そのために関係の持続が命題とされる。この違いは、これまでの住宅の有り様にも大きく作用してきた。戦後の都市住宅の貧困化は、このような日本の文化理念を忘れ、ひたすら西洋の文化理念に沿って住宅づくりを進めてきた結果であると思う。

以上に述べた問題認識から本稿は、日本の風土文化との関係から住まいの問題と特質を述べてみたい。そしてそこから住まいにおける共生とは何かを考えてみたいのである。本稿はその前半にあたる。

## 2 戸建住宅文化と中間層社会

都市の住宅はさまざまである。戸建住宅と集合住宅があり、はたまた店舗併用住宅もある。それらが都市の住宅として多様な人びとの生活を包んでいる。しかしながら、日本の伝統的で代表的な都市住宅といえば、やはり戸建住宅であろう。町屋の伝統をひく店舗併用住宅も厳密に言えば戸建であるし、農村の民家もそれである。そしてそれらの源流は縄文時代の竪穴住居に行き着くが、それも戸建である。

集合住宅に住む多くの人たちは、それは一時の仮の宿と考え、やがては最終の住宅を戸建住宅に求める傾向が強い。戦後まもなくの時期、日本の将来の都市住宅は集合住宅が主流になると、多くの関係者が思った。千里、多摩などのニュータウンに建てられたダイニングキッチンのある集合住宅は、大都市に暮らすサラリーマン家族の憧れであり、そこに住む人びとは「団地族」と皆から羨まれた。昭和30年代のことである。しかしながら、やがてそこで成長した子供たちはその団地には住まず、戸建住宅で暮らすケースが増えている。かつての栄光の団地は、今や高齢化の問題に直面している。また農村においても、戦後の新農村の建設にともなって集合住宅に住むことが提案されたが、しかし農民にはまったく受け入れられなかった。

このように日本人は、なぜこれほどまでに戸建住宅を強く求めてきたのであろうか。このことは難しい問いであるが、それは日本の風土文化の特質としか言いようがないのである。

日本人は古来から自然とのかかわりを大切にしてきた。その一つに庭の存在がある。日本住宅の庭は、西洋住宅または中国住宅の庭のように、単なる広場的なものではなく、

自然の山川草木が再現された庭である。築山をつくり、そこに地域に生えているさまざまな種類の高木と低木を植え、その周りに小道と池までもつくる。古くは平安時代の寝殿造りの庭がそうであり、近世には草庵茶室の庭があり、さらに武士住宅にも必ずそのような庭が設けられていた。農村の民家では、江戸時代の厳しい儉約令からそのような庭をつくることはできなかったが、江戸時代後期になるとその規制が有名無実化し、上層の民家では立派な庭がつくられている。明治にはその規制がなくなり、多くの一般民家で塀と庭がつくられるようになる。このように、民家の周りには豊かな森と山があるにもかかわらず、庭にたくさんの樹木を植えこみ、さらなる森をつくるのはどういうわけか。

北陸の砺波地方を旅すると、車窓からは高い屋敷林に囲まれた民家が点在する風景が見える。この屋敷林は防風林の役目もあろうが、やはり森の再現を強く感じる。そこは広大な富山平野の一角であるが、逢かかなたには立山連峰が屏風のようにそそり立つ。このようなところで家を構えたとすれば、安心するために住宅の周りを森にするのではないか。都市に残されている鎮守の森に入ると、ある種の厳粛さと同時に少しほっとして安らかな気持ちになるが、それと同じかもしれない。現代の住宅においても、小さな庭にさまざまな樹木を所狭しと植えているが、これもその表れであろう。さらに面白いことには、洋風の住宅であっても、庭だけは梅、松などの木を植え、和風の庭にしているのをよく見かける。

このように、自然を再現する庭は、古代から現代までの日本住宅においてずっと続けられてきたが、それは、自然と庭に対する日本人特有の思いが生活の根底に流れているのではないか。庭をつくる目的はおそらく、当初においては都をつくるために自然を破壊したがために、自然への鎮魂の意味が強かったと思われる。住宅の庭に破壊した自然（川、沼、樹木など）を再現し、それを祈り自然の崇りを鎮めたのである。そしていつしかその再現した自然の庭を日々愛するように変化していったに違いない。そのような庭は、戸建住宅と密接につながっている。このことが戸建住宅を強く求める理由の一つであると思う。

二つめの理由は日本人の一戸前意識である。それは、独立した住宅を建てることによって、一人前になったとする自意識であり、他人からもそのように認知される社会である。それを私は、日本の中間層社会の伝統にあると思っている。そのような社会を西洋の社会と比較しながらもう少し考えてみよう。

日本社会と西洋社会の違いを映画の中に見ると面白いことに気づく。つまり、西洋映画に出てくる住宅は大抵がアパートであるが、日本映画は戸建住宅が多い。その中の場景は、西洋映画では寝室のベッドか、または暖炉のある居間が背景とされる。これに対して日本映画は、必ずといってよいほど、縁と庭の見える座敷と茶の間などが主な舞台となる。

たとえば、有名なイタリア映画の「鉄道員」は西洋映画の代表的作品であるが、そこに出てくる主人公の鉄道労働者家族はアパート住まいである。その建物には入口は

一つしかない。そこから中央の階段を上がって各階ホールに行き、そこから各住戸へとアクセスする。また各住戸への入口も一つである。ドアを開けると中はすぐに暖炉のある居間であり、その隣にはベッドのある小さな寝室がある。そして周囲にある窓は小さい。住宅全体が防備的であり、閉鎖的である。

一方、日本映画の代表的作品である「東京物語」にそれを見ると、主人公の老夫婦は地方都市の尾道に住み、その住宅は斜面地の戸建である。主人公たちが日常的に過ごす座敷の前は縁と表庭に広く開口し、その表庭からは尾道海峡が広く一望できる。そして、家のすぐ横にある通り道へも窓が大きく開いており、そこから近くの主婦が窓越しからこやかに語りかけてくる。それはきわめて開放的である。さらに東京で町医者をしている長男の家も開放的な戸建住宅である。これは、庶民の日常を叙情的に描くことにかけては天才である小津安二郎監督の映画であるが、ほかにも大都市東京およびその近辺を舞台としたものに「麦秋」「秋日和」などがある。それらの主人公の家はやはり開放的な戸建住宅ばかりである。

このように、一般的な人びとが住む住宅を西洋と日本で比較すると、西洋はアパート住文化で、それは閉鎖的であるが、日本は戸建住文化で、それは開放的である。この違いは、それぞれの国の風土の相違に起因しているのであろうが、社会構成の違いも影響していると思う。

西洋社会は周知のごとく、一部の上層と多数の一般市民とに二極分化した社会である。それぞれに生活文化が異なり、たがいの生活文化にはあまり干渉しない。これに比べて日本社会の基本は中間層社会であるが、その生活文化は多少の階層差があっても、ほとんど同じである。西洋社会が厳格な階層社会であるのに対して、日本社会はどちらかといえば融通性のある社会である。たとえば、西洋の上層階級の住宅はとてつもなく豪華な邸宅であるが、一般市民のほとんどは都市のアパートに住み、その居住地も、上層階級の居住地とは明確に分かれている。これに対して日本の場合は、多少の金持ちも一般の人と同じような戸建住宅に住み、それらの居住地は混在している。そして誰もがその中間層に加われるという可能性と流動性を持っている。これは明らかに日本のほうが能力主義的であり、平等主義的である。

この特徴的な日本社会の源流は江戸時代にあると思う。江戸時代の社会は農村社会であり、その経済も米本位制であった。全人口の8割強を占めていた農民は本百姓という自立した小農たちで構成されていた。その割合は村の6~9割に及ぶ。彼らは、村の運営と宮座の資格を平等に持ち、平均して5反前後の土地を自己所有し、そして座敷のある戸建住宅に住んだ。しかも、藩から村に割当られた年貢と夫役の負担を受け持ち、検地帳によって藩にその身分を公式に認められた一人前の中核農家である。一戸前意識はこの時生まれたのではないか。本百姓の上には、庄屋、組頭、百姓代の村方三役がいるだけだが、その役は本百姓の中から選挙で選ばれる場合が多い。

本百姓の下には、自己所有地を持たない従属階層の水呑み百姓が1~3割ほどいるが、彼らもまた、狭小であるが戸建住宅に住んでいた。それは本百姓の次三男が主体であ

るが、彼らの中には、「しんがい」「ほまち」といった新田開発で自己所有地を増やし、やがては本百姓株を買って村の本百姓の仲間入りをする者も多くいた。

村の戸籍調査の意味を持つ宗門改帳や人別改帳を見ると、何年も経っていないのに、前回の調査の時に載っていた本百姓の名前が今回はなかったり、所有する田畑の規模が変化している事例を数多くみる。また、前回にはなかった名前が新しく載っていることもある。このように農村社会の階層構成は、決して固定化したものではなかった。

一方、城下町に住む武士にしても、その家禄は、わずか数年の間に大きく変化しているのを当時の藩士禄高帳などに多く見出す。その名前も出たり消えたりしている。個人ではなく家に与えられ、末代まで継続される家禄とはいっても、実際は大きく変動していた。それに、武士の身分を商人たちに譲りわたし、自分は町人になって気楽な人生を送った者もいる。武士の身分は売買されていたのである。このように江戸時代の社会は、これまで言われてきたような土農工商という厳格に固定化された身分制社会ではなく、かなり流動的であったというのが本当のようである。

それでは、なぜにそのような特徴的な中間層社会が日本にできたのか。私は、この理由の一つは日本の稲作文化にあると思う。稲作は古来から陸稲と水稲が行われてきたが、日本では水稲が主流であった。水稲を行うには、水田への水の安定供給と草肥の投与が必要であるが、そのために水系と里山の共同管理が不可欠である。したがって、それをうまく行うために本百姓という自立小農による平等的な中間層体制ができたのではないと思われる。言わば共存協調型の社会である。これに対して西洋社会は、自然克服型および自然対決型の文化を源流に持つがゆえに、また農業が、自然とかかわる共同管理をあまり必要としない麦作と牧畜ゆえに、そこでは自我が重要視され、合理主義と競争原理が進展し、前に述べた二極分化の社会に発達したものである。それは一方で弱肉強食型の社会でもある。

このような日本の中間層社会の特質は、政治体制が変化した明治に至っても基本的には変わっていない。建前であった4つの身分制は崩壊し、一部資本家と圧倒的多数の労働者階級に二分されていくが、しかし西洋のような二極分化は起こらず、その中に新しい都市中間層が形成されていった。それは旧来の武士系住民と上昇志向の強い農民、町人たちとで構成されている。そしてその流動性も変わらず、また農村の稲作文化もまだ持続していた。しかしながら昭和30年代後半になると、都市中心の商品経済が農村に急浸透し、同時に西洋の合理的農業を模範とした大規模農家育成農政が強引に押し進められていく。これまでの家族労働集約型の日本型の伝統農業が切り捨てられ、古来からの稲作文化はしだいに崩壊するのである。このことが原因となって、再び農村から都市に多くの人たちが大移動し、それによって都市郊外に新住宅地が急速に拡大していった。そこに住む人たちはまた、従来からの都市住民と農村から都市に新しく移動した住民たちとで構成されている。このような状況においても、いまだに戸建住宅が強く求められ、中流意識も根強い。この理由は、稲作文化を基盤とする中間層社会の伝統が文化として都市住民の生活の中に依然として生き続けているから

であろう。

### 3 現代の住まいの問題——南方位の偏重と閉鎖化

さて、前述したように中間層社会を背景にした都市の戸建住宅であるが、現代の住まいの問題はどこにあるのか。それはまず、南方位の偏重と閉鎖化の問題である。

例えば、東西道路に接する南入りと北入りの住宅をみると、どちらの住宅も北側に詰めて南側の空地进行をできるだけ広くとっている。その結果、宅地の北側は非常に狭い。これでは住宅の通風と換気に支障が出てこよう。また道路からみれば、南入り住宅は、南に広く空地があるために開放的であるが、北入り住宅は、北の道路側に建物を詰めているために圧迫された雰囲気であり、偏った街路景観である。

次に平面を考えると、南入りと北入りともに、座敷と居間などの居室群を押しなべて南面し、そして北側に便所、風呂、台所などの水まわり空間を並べている。住宅の北側は、そこが水まわり空間ゆえに窓が小さいことと、北側の宅地の狭さとは相まってますます閉鎖的になっている。このことにより、二つの住宅とも南北間の通風と換気はさらに悪くなる。それは東西中廊下によってさらに助長される。本来、住宅の通風換気は、日本の風土においてきわめて重要であり、その善し悪しが、とくに快適性、安全性、耐久性および人間の健康をも強く左右する。

南北道路に面する東入りと西入りの住宅を考えても問題は同じである。このように現代の都市の戸建住宅は、南方位を偏重なまでに重視した配置と平面であり、自然と社会との関係はあまり考慮されていない。とくに北入りを始めとして、東入りと西入りの住宅は、社会とつながる道路側に背を向けたような、あるいはお尻を向けたような形態である。

道路に開放した住宅は、近隣からみても中の様子が分かり易いし、また訪ね易い。そのことは安心につながる。その反対に、道路に背を向けたような住宅は、中の様子を外から伺うことが難しいし、その住宅に人が居るかどうか分からないようでは、近くに住むものとしては不安である。この日常的な安心と不安の差が、非常時の安全性を大きく左右する場合もある。

阪神淡路大震災の神戸において、どの家には誰がどの時間に居るかということをつがいに知り合っていた町内では、住宅が崩壊した直後に、中に閉じ込められている人を町内の人びとの協力ですばやく救出できたという。このことは、近隣社会の安全と防犯とは、消防車が入れるように道を広げたり、防火栓などを完備するというハードなことではなく、日常的な近隣コミュニケーションがきわめて大事であることを物語っている。住宅の開放性はそれを育む基盤といえよう。このような災害にはいくら道を広げても、壊れた建物で道が塞がり、また限られた消防車では全体には対応できない。そしてまた現場に着いたところで給水管が壊れて水も出ない。昔ながらの防火用水のほうに役立つことすらある。大切なことはやはり近隣どうしの備えであろう。

われわれの住生活は、家族だけの生活だけで成り立っているのではない。さまざま

な接客と祭祀があり、それを通じて社会とつながっている。接客には、目上の改まった客、家族の親しい知人と友人などがいる。また祭祀については、葬式、法事などの仏事、節句の祝い、厄払い、米寿などの通過儀礼の集いが多く催されている。

平成6年に、吹田市、福岡市、熊本市、八代市の4都市において戸建住宅の実態とそこに住む家族の生活を調査したが、その中に造り付けの仏壇を保有しているかどうかを聞いたところ、驚くことに約70%が保有していた。それは日本文化の伝統である祖先信仰が都市においても強く継承されている結果といえよう。また、新築後の3年間に、いろいろの祭祀を住宅で行った家族の割合は4都市平均で53%にも達する。これは3年間であるから、年数がもっと経過すればさらに増加しよう。このことから、祭祀と接客は住生活の重要なファクターとなっており、社会に開かれた住宅にすべきとする所以である。

以上に述べてきたように、南入り、北入り、東入り、西入りといった宅地条件の違いがあるにもかかわらず、南方位を偏重なまでに重視しているのが、現代の都市住宅の問題の一つである。この住宅を南方位重視型と名付けている。家族の生活を優先するあまり、自然と社会との大切な関係を見失なった家族中心主義の住宅といえよう。このような住宅は全国的にみられ、現代の都市住宅の主流を形成しているのである。ところが実は、現代住宅の源流である近世の武士住宅はそうではなかったのである。それは方位には関係なく、道路を基点として作られており、方位がどうであろうが道路に面して家の正面を向け、それに開放していた。つまり道路につながる社会とは密接につながっていたのである。このような日本の住まいの考えとつくり方は、明治以降、とくに戦後に大きく変わってしまったのである。

住宅の閉鎖化の問題については、すでに鈴木成文氏によって指摘されている。氏は、長年の集合住宅の研究蓄積をもとに、現代の住宅はプライバシーと個室化を強調すぎた反面、非常に閉鎖化していると述べられている（住まいにおける計画と文化）。とくに通路にたいして背を向けた状態の集合住宅を取り上げ、これからの住宅は、外（社会）に対して開放し、いへの表情、雰囲気、生活が外ににじみ出るようにすることが近隣のコミュニティと安全において大切であると述べている。これを住居の表出としている。まことに示唆に富む見解である。先に述べてきたように、戸建住宅もきわめて閉鎖化しているが、この原因は、鈴木氏が指摘している行き過ぎたプライバシーと個室化のほかに、前述した偏重なまでの南方位重視にあると思われる。

住宅の閉鎖化の問題は配置と平面だけではなく、ほかの面にも多く現れている。近年、シック・ハウス症候群という問題が起きているが、これは、新しい住宅に入居したとたん、湿疹、ぜんそく、頭痛など、身体にさまざまな異常が頻発するという問題である。本来、最も安心で安全であるべき住宅が、人間に危害を加えているという由々しき問題である。その原因としては二つが考えられる。一つは発生源の問題であり、二つは閉鎖的住宅の問題である。

戦後、内装材としてビニールクロス、新建材などが多く使われるようになった。そ

れに使用される接着剤の中に含まれているホルムアルデヒド、トルエンなどの有害化学物質が空気中に徐々に排出され、それが室内を汚染し、そこで暮らす人たちの体内に入り、障害を起こしている。また最近、やたらに防腐剤、防虫剤も使われるようになったが、それらも有害物質を排出している。木材の土台にしみこませると、4、5年もの長い間それを排出し続けるのである。

近年の住宅は必要以上に過敏で神経質になっている。多少のダニ、虫などは人間とともに共存してよいのだが、それを完全なまでに撃滅することを目的として、防虫剤を畳の中、あるいは床下などにまき散らしている。自然と隔絶した現代生活が持たらしめた神経質で潔癖症の風潮が背景にあると思うが、これでは、人間にとってもきわめて有害である。そこへきて住宅が閉鎖的であれば、なおさら有害物質を室内に密封してしまう。開放的で換気のよい住宅であれば、その問題はかなり緩和できるはずである。このように、シック・ハウス症候群の問題は、住宅材料が自然材料から化学材料に変化したことと、住宅が閉鎖化したことに原因がある。

このような意味で、最もよい住宅材料といえば自然材である。とくに木は、加工したあともずっと生きた材料であり続け、いつまでも人にやさしく反応する。有害物質などはまったく排出しない。それに肌触りがよく、湿気を吸収し、心地よい香りまでかもしだす。年数のかなり経た木でも、表面を磨くか、少し削れば新品の木とその香りが直ちに現れる。これに比べて、鉄、コンクリート、そして新建材などの人工材料は死んだ材料であり、年数の経過とともに劣化の一途を辿る。

さらに木は構造的にもきわめて優れた材料である。山から伐採した生木を含水率15%の気乾状態に近い程度に乾燥させて使うが、その寿命はきわめて長い。100年以上の民家は珍しくなく、世界最古の木造建築である法隆寺はすでに1400年を経ている。小原二郎氏によれば、1400年を経ても、その強度は伐採時よりも高く、その間に強度が最も高くなる時期は、伐採してから約150~200年後のことであるという。これは木の細胞が時間をかけて結晶化し、それによって強度が上がるからと説明されている。鉄やコンクリートなどの人工材料は、それがつくられたとたん強度がしだいに低下するのとは大きな違いである。最大の価値は、それが自然循環材料であるという点である。建物はいつかは寿命がくる。それが鉄やコンクリート、またプラスチックでつくられていた場合、それらの化学材料は自然には戻らない。ところが、木や土などの自然材料は廃棄しても、朽ちて自然に還元される。それは地球と人にやさしい材料といえる。

また、近年は住宅の高気密化を促進する動きもみられる。窓、玄関などの開口部の気密性を増し、壁の断熱性をさらに高めようとしている。そのような考えが影響しているのか、大切な軒裏と床下の換気口がますます小さくなり、住宅によってはそれが消滅したものさえある。驚くべき無知である。高気密化と高断熱化の目的は、冷暖房効率を高め、それによって省エネを果たそうとしているのであろうが、その考えは日本の気候風土にはまったく馴染まない。住宅を開放的にし、自然の通風換気をうまく

採り入れる空間構成を考えることこそ重要である。余分な機械にたよらず、自然によって夏の暑さをしのぎ、加えて住宅内部の湿気を取り除いて結露を防止する。そのことにより住宅を健康にして持続性を増し、耐用年数を長くすることができる。これこそが、限られた資源を大事にし、無駄をなくするという意味で本当の省エネである。

先の阪神淡路大震災以来、木造住宅への誤解から耐震のために壁の量を著しく増やす傾向がみられるが、これも住宅の閉鎖化を助長している。木材は軽量であり、比強度は鉄とコンクリートよりも強く、木造は本来地震に強い建物である。五重の塔は木造であるが、1400年前の法隆寺の塔を始めとして、地震で倒れたという話は古来まったく聞かない。木造建築の本質的なことを考えずに安易に壁量を増大することは、住宅の閉鎖化を促進し、やがては生活そのものを歪めていくであろう。（次号に続く）

